

3939

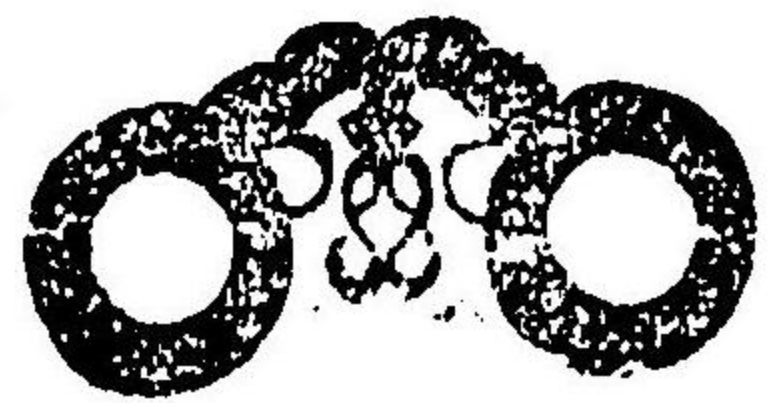
48
644

新
作
替
歌



圖書公司發行

大坂市區名所繪入



金椽眼鏡本銀椽赤銅椽新形種々、水晶本玉凸凹近平白黑眼鏡種々、獨乙製凸凹近眼鏡並ニ色凸凹近眼鏡佛國製兩眼鏡並ニ望遠鏡種々、顯微鏡種々、天眼鏡種々、則量陸海磁石並ニ金銀赤銅小付磁石種々、酒暖計寒暖計種々、貝細工酒宴器種々、名石掛物風鎮並ニ軸種々、水晶彫刻置物類並ニ水晶指輪種々、水晶印材種々、水晶丸玉種々、水晶掛物風鎮並ニ軸種々、メノウ石ボタン類各國眼鏡種々、玻璃丸玉置物三寸以上種々、幼燈器並ニ映畫運轉畫種々、畫御好ニ調製仕候

●眼鏡特別上等金七十錢●上等金五十錢●中等金三十錢●金椽眼鏡金五圓以上●銀椽眼鏡金一圓二十錢以上●赤銅椽眼鏡金一圓五十錢以上●眼鏡一個ニ付郵税四錢

●正札附厘毛引ナシ



大阪東區心齋橋筋瓦町北ノ入東側
明石屋 上村重兵衛
分店 玉集堂
全北區中の嶋常安橋南詰一丁半北入東側

諸藝新報發行之辭

エー私は此所で諸藝新報發行に付て聊かお辨説をせなればならぬ。何うか其思召でお聞否お讀を願やすと言つて。別にこれが讀なれば法律に背くの定例に抵觸するといふ譯

で、何んか、通宜として、却論今般發行の諸藝新報、豫て本社の廣告に於て豫記せ、如し、何んをも彼、余す事なく諸君に御満足を



諸君

常盤津でも一中節でも土佐節でも隆達節でも伊豫節でも園八ふしでも豊後ふしでも、鑼節と生ふしを除くの外は一切此雜誌の中へさらへ込むが本社の主眼でまた其外に演劇の筋書、購談の速記、畫探し當物は、申すに及ばず座敷手品に、口物真似、チャリ舞、舞、月琴、呎吹、三味線、胡弓、八雲の類まで記載する目的ださうです。何か其思召て次號より續々御愛讀あらん事を願ふはもとより各投書家諸君は陸續玉文、玉章の御寄贈あらん事を祈り奉り候

與ふると云ふが本社の目的ださうで。其所で此雜誌には都々逸でも川柳でも狂歌でも狂詩でも端歌でも替唄でも佐和里でも淨るりでも二〇加でも落語でも新内でも祭文でも清元でも

諸藝新報社

編輯者謹誌

諸藝新報 目録一覽表

新作	講談速記	每號	伊豫ふし 常盤津ふし 一口淨るり 大津書ふし 近作狂歌 新作都々逸
新作	演劇脚色	每號	愉快ふし キンライノ節 丹後ふし 推量ふし 追分ふし 勝利ふし
新作	諸藝新報	發行人 編輯人	見立番附 名所案内 買物案内 商家一覽表 物知り自慢 軍艦一覽
新作	演劇脚色	發行人 編輯人	謎かけ 當も物のけ 考も物のけ 書探し 手品 二〇加
新作	演劇脚色	發行人 編輯人	劍舞 チヤリ舞 落語 座敷藝 月琴 八月雲
新作	演劇脚色	發行人 編輯人	日清滑稽 日清落語 日清川柳 日清都々逸 日清二〇加 日清端歌

○諸藝新報

●日清のキンライノふし

雨庭家 戯作

●支那兵イナ。攻めて戦かや我が兵が勝ち上。末は豚尾の負け軍さ。斬られ。さんく。痛い。歐打。金箱兵器も皆捨て。チャノ坊主のかなわんわいと大負のまけ軍。あはらししいじやおまへんか

●李鴻章か。心配顔すりや袁世凱もどもに。憂い顔する淺はかなさ。日本。攻める。強い。追つめられたらかなわん子。夫れじやによつて剛いわいなと北京政府の狼狽。あわれ至極じやないかいな

●水雷火。伏せて進めば。我兵に打れ。むだにそれゆ。不甲斐なさ規律。立ぬ。遺骸。至極。水雷破裂も皆なすかでチャノ艦隊海軍負けの大馬鹿の艦隊退。青い顔やおまへんか
●清國を。攻めて進んで北京を抜て。土地を奪ふて債を取る氣味よい。ウアノ。愉快。剛だ。金融ゆたかに賑ふてスチヤン散財大祝いの。大うかれの鎮臺さん。いさましじやおまへんか

●朝鮮を。獨り立てて。改革させて。弊を改む日本國。進む。開化。自大。困る。金玉均黨の世になつて。閔泳駿等のヘコチャン談の大ペケのペケ驚々。あたり前じやおまへんか

●日清の越後獅子三段かへし

●打てよ攻めよ。清國蒙慢を。捨て願にや東洋の仇上。まこと我があだまた國の仇。十分攻めて。償金とつて。國をどつて降参させて。我日の御旗の勢い示し。勝弊を下ツトあけて。澤山兵器を分捕し。艦の捕獲引歸る。其上金塊も取る。生捕り澤山連れて歸つて。入れた所が御堂の明地。二度目の虎山の死傷は。敵兵數しれず。始終の戦ひに。我が兵の進むと清兵の逃げにドンチャン大騒ぎ。虎山を越ゆれば敵の土地。進み入る數多の我兵士。攻めて討破つたかはて心地よや。打出す小銃ポンノ追て行く。強膽に北京に乗込。首尾よく敵兵攻立攻め伏せ。凱歌唱へて日本は大勝利

●逃げよ。日本勇兵が。攻めりや命が危ふうとさる。早上逃げンレ逃げ兵器を捨て行け。豊島も負軍。牙山も大負平獲もまた負け黄海も負け。たまノひかへば生捕られ。恥をかいて。送られて。死もせず。李鴻章怨んで小言いふて愚痴をこぼして果は日本へ降参す。さんくノまけて仕舞は北京へ引あげりや。續いて攻められる。こりや叶はんと両手を合して泣出す。いづれ仕舞は償金取られ。國を渡して和ぼく願ふて。笑われて。諸外國まで恥あらはして。其上負債を殖し末大閉口。これが則ち蒙慢無禮の國の結果と李鴻章自殺して大國亡ふ

●遅いか早い支那の國。攻取つて降参さへねば止みはせぬこ
ちや止みはせぬ引はせぬ

●日清のシヨンガイナふし

●エ、エーシヨンガイナ。シヨンガ支那兵は筒先揃へて
瘦せた駄馬に鎗長刀の大仕がけ。打つて進めよナア。腰もな
So. H. H. 手向S. Y. せず。惣勢は逃げー

●エ、エーシヨンガイナ。シヨンガ我兵勇氣な我兵で。
逃げたチヤン。坊子は尙兵を進め。敵よこちららむけナ。我
が腕を。エ、エー見せてやるかいナ。夫れす、めー

●エ、エーシヨンガイナ。シヨンガ俘虜は今は漸々ど所
々にかたより今や命はなかりしか。引けば引る。ナア。殊數
繋ぎ。エ、エーていちやうの扱ひに。存命さア

●日清のカツボレ節

●沖の。海洋嶋に。白旗がア見ゆる。ヤレコノサア。ハ清國
のヤレコノコソ。降参船一トナ。一ナ負け二まけ三負て四
まけて五まけて。恥をかいて。艦を取られて火をあげて。あま
り弱さにあまり弱さに逃る氣で走りや。淺瀬の乗りあげて尙
まけるコノ何んでもせー。敗戦じや敗軍じや。翌日は未明の
闇がりに霧にまぎれて一寸逃げる。逃げたア。逃げた噂が
くれない。押寄の日本兵の強氣はおそろしいこの何んでせ

にチヤン。坊主は狼狽し。恐れおののく支那一の軍。さ
れども我兵は用捨なく。九連城を乗取らば。尙も勢い十倍し

日本男子の健腕也。日本兵士の強勇を。四百余洲に知らさん
は。今この時と一聲に。恥を思はん諸兵士は。進めや進め退
くな。向かへや向かへ敵兵に。後ろを見せぬ我勇は。諸外國
にも知られしぞ。北京の城を援くまでは。一歩も彼れに用捨
すな。北京の城を攻め取らば。償金取つた其上に。國の擔保

も談判し。凱歌あげて引き揚げる愉快々々

●廣島大本營より、戦地の模様を遠望すれば、平壤戦ひ大
捷利、黄海々戦亦勝利、敵の卑怯を見る時は、切齒扼腕慨慨
す、清國征伐堂々、一時に驅取る心地よさ、霹靂一聲電報
に、全勝急報亦萬歳愉快々々

●吉野甲板より、敵の諸艦を見下ろす時は、定遠鎮遠眞先さ
に、我砲撃の命中し、死する海兵幾千ぞ、右往左往に狼狽し
忽地淺瀬に乗りあげて、一時に火を出す艦もあり、避易一層
恐懼して、前遁後亡雲漢々愉快々々

●日清のノンノコサイ。節

●悪いチヨイ。慈姑は斬らナキヤならぬ、ノンノコサイ
く、もろく、チヨイ。いまして勝聲をあげる、ノンノ
コサイ。シテマタサイノサイ

●九いチヨイ。赤玉は斬るどて斬れぬ、ノンノコサイ

●日清の愉快ふし

●日清の交渉事件が破烈となりて。宣戰發布の其後は。何の
遠慮も支那の國。無禮重なる敵兵に。日本魂現はして。進む
軍人勇ましく。千辛万苦も厭ひなく。波瀾に上陸其後は。陸
國厚義の義兵ぞや。これを朝鮮獨立を思ふ。帝意の聖恩ぞ。

夫れに引換チヤン。の。袁世凱だの李鴻章は表に厚義を粧
ふて。内心利慾の目的を。達せんための底意にや。豚尾頭を
撫廻し。國の廣きを鼻にかけ。敵の多きを自慢にて。人形同
様の雇兵軍人氣取りでならべても。素より無腰の烏合兵。片
端から踏殺し。日本魂輝かし。目にも見せんと我兵が。

進む心は金銀ぞ。忠と勇とに身をかため。降り来る彈丸飛越
て。敵兵を破る進軍は。恰も猛虎にことならず。名譽輝く
其上に。海陸ともに大勝利。凱歌を唱ふ其聲は。天地動かす
新日本。皇統萬世の帝國也。朝日の御旗を海外に。宣揚なせ
し大萬歳愉快々々

●牡丹堂から四方の敵地を眺望すれば。殺氣妖雲驟起。激
戰激闘濟んだ後ら。尙も繰り出す我兵は。勇氣勃々憤然と。
朝日の國旗押立て。水口鎮の上流へ進む進軍目覚しく。鴨綠
口の大江も。難なく越して對岸の。數百の敵を攻撃し。大砲
二門と砲壘を。略取なせし其上に。數多の小銃奪ひ取り。更
に進んで行く先きは。九連城と我れ先きに。勇み進んだ勢ひ

イ、元より、チヨイ。勢いの強い國、ノンノコサイ。シ
テマタサイノサイ

●惜いチヨイ。チヤン。捕子になれば、ノンノコサ
イ。命ち、チヨイ。助けて仁慈を加へ、ノンノコサ
イ。シテマタサイノサイ

●愉快チヨイ。極まる我兵の大捷、ノンノコサイ。、
やがて、チヨイ。北京で敵をうつ、ノンノコサイ。、
シテマタサイノサイ

●四百チヨイ。余州に羽を延す蜘蛛、ノンノコサイ。、
今に、チヨイ。五大洲に威を示す、ノンノコサイ。、
シテマタサイノサイ

●支那のチヨイ。李鴻章は苦しかる、ノンノコサイ。、
内は、チヨイ。不平で外は敵さ、ノンノコサイ。、シテ
マタサイノサイ

●支那のチヨイ。軍艦は豊島でまけて、ノンノコサイ。サ
イ、又も、チヨイ。海洋島で敗をえる、ノンノコ敗。、
シテ又敗の敗

●日清のヨカチヨロ節

●手出し。見る、只置くものか、ばつばよかちよる、掴み
殺して城も捕る、ばつばよかちよる、すいがすわのほいで、
わしがしつちよる、しつちよる、いはいでも、しれちよるは

つば
●我兵進めば、必らず勝利、ばつばよからよる、勝てる筈だ
上強いの、ばつばよからよる、すいがすわのは、で、わし
かしつちよる、しつちよる、いはいでも、しれちよるばつば
●逃げて見やがれ、逃してなるか、ばつばよからよる、命ち
や元より武器もどる、ばつばよからよる、すいがすわのは、
で、わしがしつちよる、しつちよる、いはいでも、しれちよ
るばつば

●合の息つき、飲む日本酒、ばつばよからよる、數度の勝利
の祝酒、ばつばよからよる、すいがすわのは、で、わしが
しつちよる、しつちよる、いはいでも、しれちよるばつば
●いづれしまいは、日本にまけて、チャン／＼よわツチヨル
國を取られて恥をかき、サツサヨハツチヨル、清の兵がはう
／＼で、我軍が吉兆で、祝でも立派でばつば

●日清のシンカラ節
●支那を攻めるなら、十分懲して攻めしやんせ、支那は身法
で、奸悪不頼じやと思はんせ、兵站部で十分兵糧貫るて、進
めば、シンカラ／＼真から強い、日本魂いと支那のチャンチ
ヤン坊は競べられない
●半壞 戦ひに、敵兵を殺して城どつて、尙も進んで、海洋
海戦の大勝利、大將さんに頼んで暇もろて、出て見れば、シ

ない、これかまことの清だ死た

●北京勝利にや、敵國奪い、償を出させて大將大祝、これ
かまことの祝砲だ祝砲だ

●日清の丹後ふし

●所詮かなわぬ、チャン／＼坊子、あたら命を的にする、弾
丸飛してボンどうつた
●所詮かなわぬ、清艦數隻、あたら船体的にする、大砲飛し
てヤンどうつた

●入らぬ事して、身を苦しめて、末は自殺の李鴻章、澤山兵
士を雇い出した

●北京取られて、泣顔さげて、諸外國にも恥をかき、澤山の
入費で貧乏さした

●武威を示して、世に辱られて、日本兵士の勇ましさ、帝國
威勢をピンと出した

●日清の推量ふし

●支那のエア、推量／＼、チャン／＼は柳の枝よ、ちよいと
さの上やさ、のさ末に、こりやしよ、なるほど、實、手を
なげる、よいやさア、よいやささいと、ありやさあ、こりや
さ、やあどせ、せろのろ、ありや推量／＼

●日本のエア、推量／＼、兵士は冬至の菜刀、ちよいと、さ
の上やさ、無暗、こりやしよ、南京、實、斬り倒す、

シンカラ／＼、真から愉快、立つたコラフと、ならぶ日章、大
捷號外

●國を愛すなら、命を惜しませ進まんせ、他に遅れたら、日
本の恥辱と思はんせ、大隊中隊小隊連隊皆進み、繰出せば、
清國／＼、清國逃げる、捕つた兵器と奪ふ金貨はたんど／＼

●今度進むなら、北京のもどまで進まんせ、若しも、仲裁す
るも断然謝絶と捨てしやんせ、神佛に頼んで加護貰るて、
乗り出せば清國／＼、清國弱い、最期覺悟で、泣て詫入豚尾

●北京落したら、償金出せて土地どつて、東洋、平和に、帝
國萬歳頭はんせ、チャン／＼坊に談判して罰金どつて、引揚
げりや、シンカラ／＼真から愉快、祝ふ祝詞に、並らぶ日章
花火ボン／＼

●日清の本田ふし

●半壞 略取すりや、敵がヒヨロ／＼逃げる、逃げりや我兵
がドット追かける、これがまことの本田はんた

●北京落せば、敵が皆な／＼降る、降りや我兵がサツサ
さ、これが大和の魂だ魂だ
●いづれ仕舞は、力が弱る、弱りや支那兵がサツサ負け軍さ
これがまことの損んだ損んだ

●自殺せなけりや、李の身が立ぬ、立ぬはづたよ最初出そこ
よいやさア、よいやささいと、ありやさあ、こりやさ、やあ
どせ、せろのろ、ありや推量／＼

●支那のエア、推量／＼、李鴻章は不具の煙管、ちよいと、
さの上やさ、口は、こりやしよ、立派で、實、外はない
よいやさア、よいやささいと、ありやさあ、こりやさ、やあ
どせ、せろのろ、ありや推量／＼

●菊のエア、推量／＼、霧りはいづくへ往ても、ちよいと、
さの上やさ、人にこりやしよ、好る、實、日出度さ
よ、よいやさあ、よいやささいと、ありやさあ、こりやさ、
やあどせ、せろのろ、ありや推量／＼

●國のエア、推量／＼、爲めなら妻子は愚か、ちよいと、さ
の上やさ、親もこりやしよ、命も、實、かへり見ぬ、
よいやさあ、よいやささいと、ありやさあ、こりやさ、やあ
どせ、せろのろ、ありや推量／＼

●日清のチヨムコふし

●李鴻章軍令して、雇兵を使ふ、チヨムコ、使やたちまち、逃
げてゆく、チヨムコ

●支那は大國と、威張つて見ても、チヨムコ、口と心は裏表
て、チヨムコ

●艦は碎ける長城は落る、チヨムコ、果は北京自殺する、チ
ヨムコ

●兵も軍器も、我が手に落ちて、未は北京の城も落ち、チヨ

●軍さ勝利で、凱陣あげて、諸外國にも名をあげるチヨノコ

●日清のトメヨナラふし

●支那を攻めよなら、攻めよがござる、勇氣たゆまず攻めし

●豚尾捕うなら、捕り様がござる、四方圍ふて押寄せさんせ、

●怒姑斬るうなら、斬り様がござる、日本刀で斬らしやんせ

●軍さ止めるなら、止めよがござる、償金擔保の國を出せ、

●命おしけりや、降参いたせ、詫る敵には手は出さぬ、助け

●日清のヤツツケロふし

●清國軍艦攻め討つ時にや、其時や遠慮はいらないよ、ドン

●大砲で、ソラヤツつける

●支那の軍勢見附けた時にや、其時や遠慮はいらないよ、手

●敵の陸地に上かつた時にや、其時や遠慮はいらないよ、ド

●北京攻め取り勝つたる時にや、其時や遠慮はいらないよ、

●結局談判勝利の時にや、其時や遠慮はいらないよ、十分協

●日清のトコシヨイふし

●私しや剛いよ、日本の兵士、命ち惜しまぬ勇進にトコシヨ

●假令軍さは、まけても平氣、雇はれ兵士の逸支度トコシヨ

●これから眞實の、軍さになるよ、敵地へ入らねば實が入ら

●四百余洲を、照りかややかす、日の丸國旗の勇ましさ、ト

●日清の落語

●朝鮮の國では南京の切賣が大變安いそうだが相庭は聞たか

●平壤の戦ひには第一軍が立見少將第二軍が大島少將第三軍

●日清の戦争に附て此頃第一に能く賣れるものは何だらう

●日清の戦争に附て此頃第一に能く賣れるものは何だらう

●日清の戦争に附て此頃第一に能く賣れるものは何だらう

●日清の戦争に附て此頃第一に能く賣れるものは何だらう

●日清の戦争に附て此頃第一に能く賣れるものは何だらう

●日清の戦争に附て此頃第一に能く賣れるものは何だらう

●日清の戦争に附て此頃第一に能く賣れるものは何だらう

●日清の戦争に附て此頃第一に能く賣れるものは何だらう

●日清の戦争に附て此頃第一に能く賣れるものは何だらう

●日清の戦争に附て此頃第一に能く賣れるものは何だらう

●日清の戦争に附て此頃第一に能く賣れるものは何だらう

●日清の戦争に附て此頃第一に能く賣れるものは何だらう

●日清の戦争に附て此頃第一に能く賣れるものは何だらう

姿の拵へはチャン／＼坊子といふ心組の拵へにて手に鉄
を持ち出て来り

●サア／＼大鏡々々牙山や豊島と違ひ此半環は大同江を前に
扣へ其上三個の堅壁を築き李鴻章麾下の精選にかゝる五千の
清兵をもつてこれを守りたればよもや此度は負けまいと思ふ
に第一が立見少將第二が大島少將第三が野津中將と三方四方
から(と鉄をもち附て)鉄ぶちだ

姿は日本兵士のこしらへにて手に鐮を持ち出て来り

●賢くも我帝國の軍隊は萬國無比の武威を以て豊島牙山の初
戦は元より平壤海洋島の陸海兩戦に於ても何んなく支那兵を
皆殺にいたし此上は旅順口から、義州、奉天府、鴨綠口、天
津、北京と段々攻めて目にも見せん諸隊「鐮め」

姿は新聞の配達といふこしらへにて手に女の笄を持ち脇
の下に新聞を挟み出れり

●ア、いそがしい／＼此頃の新聞の配達はいそがしい事は
ないわい日清事件の電報が多い上に臨時帝國議會の開會があ
るので實に足も腰もメリ／＼する様だイヤそんな事いふて居
られぬ「ハイ笄」

●日清の狂言

●これは此度征清軍に従事せし兵士の一人でおじやるが、イ
ヤハヤ敵の清兵の無氣力なるにはズント驚き入りたり、豊島の

く)國は朝鮮、時の執權、閔の一族矢鱈にはびこり、それ
に従ふ多くの役人、上を見習ひ下を虐げ、重斂苛税を無闇に
取立て、質朴愚直の農工商等も、苦しむが怒りも變じて
一時に破裂し刀鎗鐵砲、或は銅鑼、てん手に提さげ、全羅地
方の要所に籠りて、其勢積つて二千三千、馬鹿にせられぬ一
揆の勢ひ困つたものだよ(カツポン／＼)そこで此奴等自
ら稱して東學黨とは當惑千萬、天に代つて姦官賊吏を、誅罰
するとして地方の官署を、メチャ／＼毀して、縣令を殺して郡
吏を縛つて、牢屋へ押込み金銀衣食は分捕功名、手當り次第
に亂暴したので、此事忽ち政府に聞かされて、開た政府も周章狼
狽、兵士を差向け鎮めて見られど、勝に誇りし東學黨勢、中
々手強味方が敗走、始末におへねエ、(カツポン／＼)流石の閔家も青菜に盤にて、恐れ戦きアル／＼ものにて、泣
がなばかりの氣色を見てどり、支那の遺官袁世公使は、深切
ごかしに忠告するやう、彈丸銃器と兵隊貸すから、夫れにて
彼奴等を殄滅し給へ、素より朝鮮は中華の屬邦、傍觀坐視す
る所でないなど、胸に一物野心を藏めて、柔和に見せかけ、
ウマ／＼欲めたり、ヤレ／＼氣の毒、(カツポン／＼)ウカと
乗つたが閔の泳駿、地獄に逢ふたる心地で、嬉れし涙を
垂して喜び、再拜九拜助けを求めた、袁の世凱得たりかして
し、早速兵隊洋山送ると、之を聞たる東洋の雄邦、亞細亞の

戦ひもサリ逃出し牙山の戦ひにもサリ逃出し平壤でも海
洋でもサリ／＼とサ／＼メキ願いで、いつも逃ける斗りとは
笑止千万イヤ何かといふ内最早これは鴨綠江にや、先づ敵の
様子伺ふて進まんイヤ居るは／＼我兵の進撃を恐れてか
凡七八千も居ると見ゆるはイヤ一戦に討破つて目に物見せて
呉れんエイヤエイヤツトナは……皆逃出し居つた「逃る
とてやるまいぞ」

●これは支那の李鴻章が麾下に従ふ兵の一人でおじやるが
何が此度の合戦に、豪勇無双の日本を相人に、一度ならず二
度三度の敗軍と在つて、進も常備の兵士にては、覺束なきま
り俄に兵を雇ふとの事に雇はれは致したれど、素より練習た
事もなき戦の進退を知らずはづもなく、よしまた聊か知つた
所で、逆も日本兵と戦ふて勝れる筈もなければ、あちらへい
ては程よく逃のびこらへいては首尾よく落ちのび何んでも
彼でも逃げまわつて居れば夫れでよいと申すものじや、イヤ
何かといふ内最早日本兵が押寄せて参つたを見ゆる早く逃
げねば「なるまいぞ」

●日清支那墮落經

ヤメレ一東西、お集まりの檀那方へ、笑樂坊主が申上す、
お經の文句は、今度此度、日清事件の、願きの發端、どうし
た種にて、誰れが蔭たど、尋ねて見るのに、(カツポン／＼)
盟主が、信と義とには一歩も譲らぬ日本魂、何の猶も荒蕪
乗つ切る、數艘の軍艦兵士を滿載、向ふ處は仁川港口、旭日
旗章は朝日に輝き、立派なとたよ、(カツポン／＼)規律
の正しき盛んの軍勢、威風凛々あたりを拂ふて、勇み進んで
京城に入込む、一足後れた支那の弱兵、居所にまごつき、仕
方がないので牙山へ陣取り、近傍民家を荒して廻るは、東學
黨より餘ッぽど惡黨、我儘氣儘の遣りたい放題、朝鮮の爲に
は不爲にこそなれ、爲にはならない厄介兵隊、おれゆる閔氏
も今更當惑、それに引替へ日本の勇兵、弱きを扶けて暴を
控へは、世界獨歩の義侠の本領、茲に至つて末年霧中に、
迷つて居たりし朝鮮有志も、始めて奮發國王陛下に、いろい
ろ建白早速御裁可、大院君をば御苦勞ながらも、萬事の總裁
姦臣賊吏を殘らず免職、閔氏は遠嶋、ヤレ／＼いゝ氣味、(カ
ツポン／＼)續いて弊政改革始まり、日本仕組の政府の制度
が、着々緒に就く、然るに頑冥固陋のチャン／＼、燒餅越し
て朝鮮領土は、己等の屬國、日本の干渉不都合などと、此
方に對して敵意を現はし、ドン／＼兵隊、牙山に送りて軍の
支度を豊島沖にて、見認めた軍艦さうはさせじと轟然一發、
高陞沈没操江分捕、廣乙自燒に濟遠遁走、一千餘りのチャン
／＼坊主が、ア／＼沈んで残つた奴原、葬々生捕り日本へ
送還、是れにはいッかな豚尾の老爺も、始めて目が醒め閉口

するかと思つて居たのに、性懲りもなく牙山の陸兵、成嶽驛にて防戦するとは、去りとは大馬鹿(カツボン)くく)大島旅團が鋭い砲撃、争でか敵せん、敵々敗北、五百に餘れる死人の天窓は、時節柄とて莖の付たる、南瓜や西瓜が、あちらにコロ、こちらにコロ、山も野原も一夜の内にて瓜の畑と變じたをかしさ、此くと聞いたる支那の政府は、驚ろき桃の木、山椒の木の芽か、夜の目もあはない、下らぬ人足金にて買出し、兵士に仕立て、鐵砲かつがせ、義州道より平壤に推し寄せ、四萬の天兵、屬國危急を救ひの爲めなど大きな法螺にて、愚民を欺むき、金銀兵糧勝手に取揚げ、相もかはらぬ亂暴狼藉横着ものだよ、(カツボン)くく)日本の軍隊手筈を定めて、四方を取巻き烈しき攻撃、山河に轟き天地を動かし、暫しの間に忽ち落城、豚の親分四五正生擒り、小豚の死傷は數も限りも、知れない程だよ、夫れにも又もや第二の海戦、四艘は沈んで三艘は焼れた、勝に乗じて益々追撃、渤海蹂躪、天津粉塵、日ならず北京の城下に攻め寄せ、否應云はせず兇をぬがせて、百万兩の罰金出させて、東洋の英雄亞細亞の豪傑、世界第一李鴻章など、世間知らずに威張た老爺の、生肝引きぬき、(此處義太夫入り)李鴻章とてお情けは仇に返しはせぬものをだましに攻め来る日本兵迷の力もあるならば可愛とツツタ一言のと」年々日本に貢を

出させて、四百餘州の大きな身牀の、汚れた垢をば曹達で落して、石鹼で研いで清水で洗つて、日本の屬國清唐うれしい歐米諸國の羨やむやうなる、美男に仕わけて、獨逸が英露でも、指でもさしたら、さくはしねエと、威張返して凱歌を唱ふる、日本萬歳、日本の光は世界に輝やき、日本の威風は四海を靡かす、誠に目でたい今度の出来事、是から後には歐米諸國も、日本と聞たら南無阿彌陀佛、支那と朝鮮我領邦通外境、(カツボン)くく)くく)

●日清のヤンソムシ

支那のサアエ、今度の其の風聞は扱もめづらし新聞はなし場所平壤と黄海附近、丸い日章に朝日の旗は、音に響きし日の本兵士、數多支那兵の堅むる中を、おめすおくせず進みし勇は、東洋發育の忠勇無二と歐米諸國の皆どり沙汰上、分て烈しき其働きは比叡松島西京丸と、今日も翌日もの噂にのこる、夫れに引かへチャン)坊子、豊島牙山の手並に凝りすまたも、平壤と海洋沖で、初度の恥辱をどりかへさんと、海にや水雷山には諸壘、野砲大砲さも嚴重に、防ぎ備へてかためはすれど、これをものとも思はぬ日本、陸は三方四方に分かれ、海は諸艦の列調へて、何んの苦もなく水陸攻めりや陸は平壤の諸壘を碎き、海は諸艦を海底に沈め、死せし支那兵其數しれず、日本兵士に死傷は稀れよ、これも偏に我皇國

するかと思つて居たのに、性急りもなく牙山の陸兵、威嚇聲にて助戦するとは、去りとは大馬鹿(カッポン)くく)大局が鋭い砲撃、等でか敵せん、敵々敗走、五百に餘れる死人の天窓は、時節指して憂の付たる、南瓜や西瓜が、あちらにコロく、こちらにコロく、山も野原も一夜の内にて瓜の畑と變じたをかしさ、此くと聞いたる支那の政府は、驚ろき桃の木、山椒の木の芽か、夜の目もあはな、下らぬ人足金にて買出し、兵士に仕立て、鐵砲かつがせ、義州道より半壁に推し寄せ、四萬の天兵、屬國危急を救ひの爲めなど大きな法螺にて、愚民を欺む、金銀兵糧勝手に取揚げ、相もかはらぬ亂暴横着ものだよ、(カッポン)くく)日本軍隊手筈を定めて、四方を取巻き烈しき攻撃、山河に轟き天地を動かし、暫しの間に忽ち落城、豚の糞分四五正生擒り、小豚の死傷は数も限りも、知れない程だよ、夫れにも又もや第二の海戦、四艘は沈んで三艘は焼れた、勝に乗じて益々追撃、渤海噴噴、天津粉塵、日ならず北京の城下に攻め寄せ、否應云はせず兎をぬがせて、百万兩の罰金出させて、東洋の英雄亞細亞の豪傑、世界第一李鴻章など、世間知らずに威張た老爺の、生肝引きぬき、(此處義太夫入り)李鴻章とてか情けは仇に返しはせぬものをだましに攻め来る日本兵達六の力もあるならば可愛とクツク一言のと一年々日本に貢を

出させて、四百餘州の大きな身牀の、汚れた垢をば曹達で落して、石礮で研いて清水で洗つて、日本の屬國清唐うれしい歐米諸國の羨やむやうなる、美男に仕あげて、獨逸が英露でも、指でもさしたら、さくはしねエと、威張返して凱歌を唱ふる、日本萬歳、日本の光は世界に輝やき、日本の威風は四海を靡かす、誠に目でたい今度の出来事、是から後には歐米諸國も、日本と聞たら南無阿彌陀佛、支那と朝鮮我領邦連外境く、(カッポン)くく) ●日清のヤンレふし ●支那のサアエ、今度の其の風聞は扱もめづらし新聞ばなし場所は半壁と貴海附近、丸い日章に朝日の旗は、音に響きし日の本兵士、數多支那兵の堅むる中を、おめすかくせず進みし勇は、東洋發育の忠勇無二と歐米諸國の皆より沙汰上、分て烈しき其側きは比叡松島西京九と、今日も翌日の噂にのこる、夫れに引かへチャン)坊子、豐島牙山の手並に凝りすまたり、平壤と海洋沖で、初度の砲聲をとりかへさんと、海にや水雷山には諸壘、野砲大砲さも嚴重に、防ぎ備へてかためはすれど、これをものとも思はぬ日本、陸は三方四方に分かれ、海は諸艦の列調へて、何んの苦もなく水陸攻めりや陸は平壤の諸壘を碎き、海は諸艦を海底に沈め、死せし支那兵其數しれず、日本兵士に死傷は稀れよ、これも偏に我皇國



萬國第壹等有名化粧品

美人の化粧

瓶入大廿錢 中十五錢 小五錢

此美人のはたは從來のありふれたるものとさかしのいにあらず故に衛生善き良品なり 色を白くしかを花であしのさりをこまかにし。にさび。あせは。ひ。しもやけにもよし

人肌水

瓶入 小金五錢 大 金十錢

猶大氣水は巴里紳士貴婦人化粧品にして其名を鏡言して茲に發賣す 色を白くし美麗なる事さみなりかをばだよきでものさめこまかにしひしもやけにもよし すべて湯上り化粧下にも用よべし 全國至る所賣藥舖及小問物店にあり

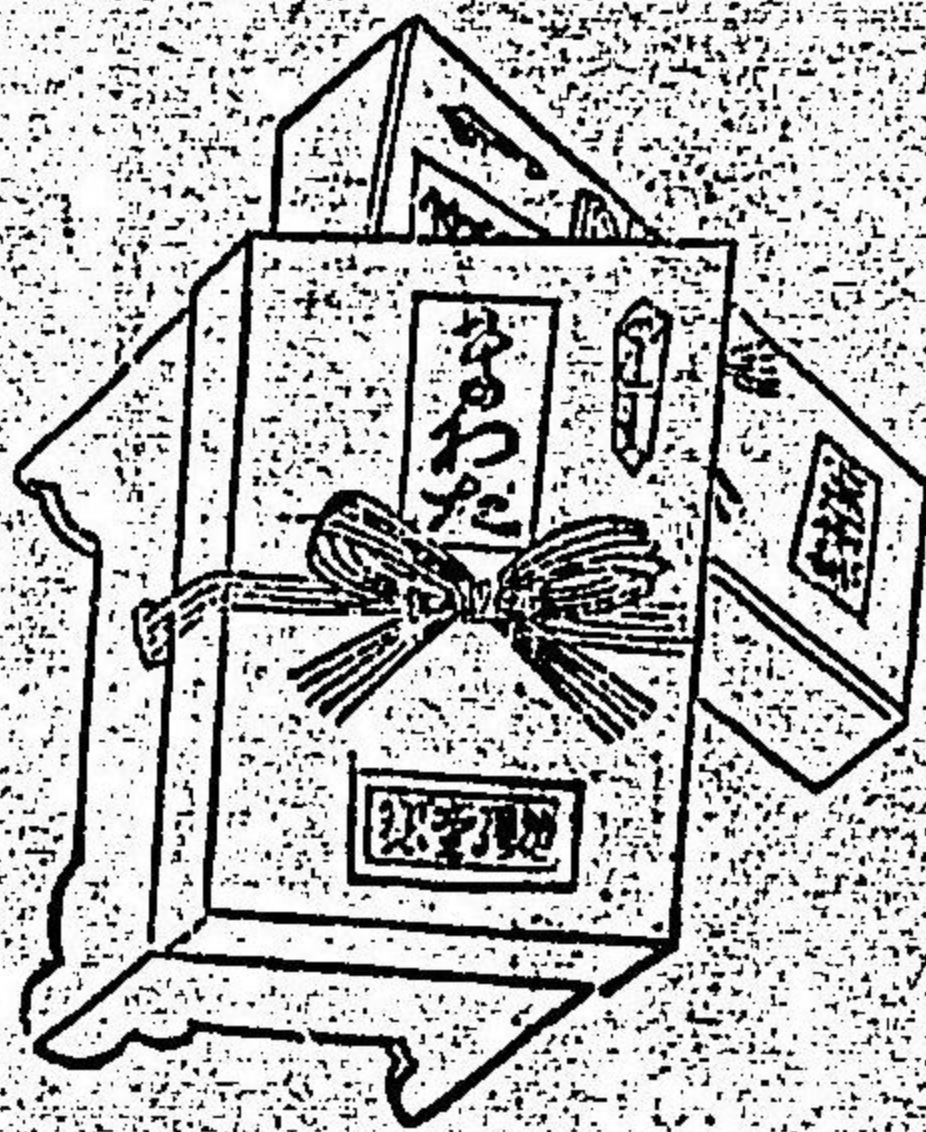
發賣本舖

愛生堂

大坂店物町筋心齋橋西入 旭谷徳兵衛

三色眞綿箱入

三色眞綿は御進物用に最も輕便にして至極体裁宜しく殊には蒸物祝餅等とは違ひ進物先にも直して置ば何時にても入用の節は間に合ふ事なれば經濟上にも都合よく殊には代價の低廉なる上に美麗なれば年暮年賀生産産婚姻宴會の焼物等其他萬般の祝儀には頗る適當の者にて此の三色眞綿を措ひては他に優る品あらざるべし



大坂内本町松屋町南入東側

全東區平野町淀屋橋東入北側

岩崎勉強堂 岩崎三菱堂



定價 大箱入 二十錢 中箱入 十五錢 小箱入 十錢 袋入 五錢

男女色白くし全身の悪臭を去るの新法 ●本劑は江湖諸君の能く知る處なり尙御試用ありて御高評をのる

製造本舖

大坂市南區順慶町中橋南入 山口保誠堂

次號懸賞募集廣告 入花無料

新調之部

變調之部

- 都々逸 かちいくさ
- 狂詩 芝居見物
- 發句 勅題(寄海祝)
- 冠句 勝つた〜
- ばうた 四季の春 十日戎
- 江戸歌 をとし文 御所車
- 地唄 つるの聲 くる髪
- さわり 戦争によする文句

賞品 天 壹圓之書籍 地 七拾錢之書籍

以上當撰之方は進呈す

粹も不粹もこき交せし詩歌句い事がおいやなら四疊半間の爪
 弾きに二上り端唄の糸しらべ地歌長唄變もん句さんささめ
 く大座敷のめよ唄へはやせん蠶ふし一番目には伊豫の節二番
 目には二〇かちやり舞三番目にはさんばさう目出度〜に〜
 ラ〜へ四番目には米山じん句五番目には後世を大事と阿房
 陀羅經六つ無關にあて推量ふし叙舞は愉快や勝利ふし七番目
 にはヒヤ〜木やりふし八番目にははやり歌九つ聲の調べは
 大津繪をい分鎌倉琉球丹後ふしシシカラ愛國末のため十でト
 ッチリトン都々逸ダンガガンノ〜エドツコイシヨホーカイ
 安寺サ、名古屋でも載するサイコ〜と御投書を仰き
 ます日に書時にかき書に書べん利の郵便に封じ込で送り給へ
 我愛讀者意氣らしいじやないかいな茶無でも何んでもこちや
 カマヤセヨ 館主に代つて 朝哉坊の寝言 如件

玉吟 一月五日限 千日前坂町角 圖書館

遊廓諸君ニ稟告

日本遊廓史 全四冊

● 定價金貳圓 豫約金壹圓六十錢

此書ハ思無邪婆卒天民多年之ガ編纂ニ從事シ頃日漸ク脱稿セ
 シ慮ナリ我國遊廓娼妓ノ起原及ビ沿革社會ニ於ル利害古今ノ
 法令規約風俗慣習ヲ始メトシ藝妓帶問ノ由來名妓豪客ノ實傳
 等古今ヲ網羅シ巻尾ニ娼妓存廢ノ可否ヲ論シ存娼ノ止ムニカ
 ラザル所以ヲ斷定シ且シ遊廓娼妓ノ續弊ヲ列舉シ革新ノ考案
 ナ記シ加フルニ東西各國ノ沿革ヲ附記シタレバ古今未曾有ノ
 寶書ナリ江湖ノ諸君陸續申込アラン事ヲ
 來無居士立案

遊廓改良論

全壹冊百二十頁 定價二十錢 正價十七錢 郵稅四錢
 本月已ニ發賣セリ各遊廓ノ營業者ハ勿論江湖ノ諸君一本
 ナ購讀アラコトヲ希フ

大阪市南區千日前坂町

發賣所 圖書館

高尙無比すき焼

牛肉素焼

弊店無此ナ
 高尙無比ナ
 所高評ナ
 ス自今一
 改其シテ
 量ナ精撰
 食ニ其注
 意ニ他注
 ナシラザ
 各味來ツ
 前音ノ實
 試ミラレ
 一ニ其全
 ノ周テ注
 實ニ各ガ
 豫想ノ外
 アリ

大坂淡路町浪花橋

改進亭

嗜好家各位愛顧ニ垂賜

の理感高きとニッは諸士の、忠勇無二の働きなりと、戸毎々
 々に國旗を立て、陸と海との大捷を祝す、祝ふ祝酒の醒さる
 内に、またも愉快の我大捷は、支那と韓地の國境なりし、海
 を渡りて敵地に進み、虎山其他の敵地を占めて、軍器分捕り
 頗る多く、尙も進んで北進なせば、今に天津北京も攻めて、
 償を收めて凱歌を奏し歐米諸國に我が日の本の、武威を示す
 は愉快なり
 ● 戦地の軍人へ寄贈する物品 筒條へ更に眞綿を加へられた
 から此間も松屋町本町南へ入岩崎万蔵の店へ眞綿製の綿子と
 外の綿類を買いに往たがアノ家は勉強する丈に代居物はイ、
 が價はかたいチ「イヤ己れが買ったのは平野町の淀屋ばし東
 入綿屋で岩崎三ツ菱堂といふ家だかアノ家でも綿類は中々勉
 強するが價はすこしもまけないで強氣にかたいよ「おまへ方
 は二人りとも其譯をしらないかアノ二軒とも堅い筈だ「ナセ
 「どちらも岩崎だから
 ● 君聞たか今度愈々北京も我兵の略取する所となつて十百億
 万圓の償金と〇〇の地を東洋平和の擔保として日本へ取る事
 になつたさうだか其祝としてキリンビール百万ダスと若みど
 りといふ美髮香水五千万ダスを戦地の兵士へ送つたものがあ
 るさうだかビールは兵士に適當だか髪をふやし又はのは
 せを引下げ、ふけをさる妙薬の若みどりを戦地に送つたのは

嗜好家各位愛顧垂賜

牛焼肉素情

鮮店すき焼
高尙無比ナ
ル既ニ到ル
所高評ナ博
ス自今一層
改良シテ原
品ヲ精撰シ
食樓上ヲ注
意ニ其テ清
潔ニラザル
ナシテ嗜好
各位ノ實チ
前ヨリ注シ
試ミテ完全
ニシテ其意
ノ周到ナル
豫想ノ外ニ

大阪淡路町浪花橋

改進亭

高尙無比すき焼

の聖威高き二ツは諸士の、忠勇無二の働きなりと、戸毎々々に國旗を立て、陸と海との大捷を祝す、祝ふ祝酒の醒さる内に、また愉快の我大捷は、支那と韓地の國境なりし、海を渡りて敵地に進み、虎山其他の敵地を占めて、軍器分捕り願ふ多く、尙も進んで北進なせば、今に天津北京も攻めて、値を收めて凱歌を奏し歐米諸國に我が日本の、武威を示すは愉快なり

●戦地の軍人へ寄贈する物品 箇條へ更に眞綿を加へられたから此間も松屋町本町南へ入岩崎万藏の店へ眞綿製の綿子と外の綿類を買いに往たがアノ家は勉強する姿に代呂物はイ、が價はかたいチ「イヤ己れが買つたのは平野町の淀屋ばし東入綿屋で岩崎三ツ菱堂といふ家だかアノ家でも綿類は中々強するが價はすこしもまけないで強氣にかたいよ」おまへ方は二人りとも其譯をしらなひかアノ二軒とも堅い筈だ「サセ」

「どちらも岩崎だから」

●君聞たか今度愈々北京も我兵の略取する所となつて十五萬萬圓の債金と〇〇の地を東洋平和の擔保として日本へ取る事になつたさうだか其祝としてキリンビール百万マスと若みどりといふ美髪香水五千万マスを戦地の兵士へ送つたものがあるさうだかビールは兵士に適當だか髪の毛をよやし又はのばせを引下げ、ふけをさる妙薬の若みどりを戦地に送つたのは

とふいふ譯だらう「夫れを知らないとは余程茫然だ「ナセ」キリンといふものは太平の收まる御世に出るもので殊に若みどりもキリンビールも高麗橋四丁目にある有名な明治屋に賣るものだから明らかに治る時には適當のものだ

●日清事件都々逸

- 支那のことばに信がなくて日本ことばに嘘がない
- 大和魂は太陽のごとく支那の膽玉芥の粒
- 牡丹臺での大戦争に支那の兵士が狂ひ死し
- かつた〜と支那兵のいふは苦しかったと剛かつた
- 敵を松嶋軍慮も吉野嶺高千穂勝軍
- ねづりつくよにいふ日本兵かんでばき出す支那の沙汰
- 支那の壽命と救日の線香とふせ短い事である
- 長い思案に引かへ敗けて逃げる軍の足早
- 日本の勇氣に膽魂も芥子坊かへて逃げまわる
- 弱いやつまた卑怯なやつはチャン〜豚尾の馬鹿なやつ
- 髪の毛ばかりは矢鱈に長く命短いな豚尾軍
- 愛いう目には鴨綠江を略取北京へ逃げかへる
- 向ふ敵なし我が勝軍せける筈なし引く氣なし
- 金も兵器も皆捨置いて命捨て逃る支那
- 君のためまた國家の爲めに捨る命は惜しくない
- 日本兵士の勇氣に恐れ慈姑〜と逃る支那

○支那のとりこの妻子が曰く

三勝半七「何所に何うしてござらうやら今更かへらぬ事ながら

兵の募りがうらめしい 雨 狸 家

●日清の狂句

雨 狸 家

- 髪の毛も思案も長い支那の國
- 我が勇は猪獅々支那は豚尾なり
- 勝軍國旗と共に立つ人氣
- 萬國に輝き渡る日の御旗
- 玄武門韓信にする原田の翠
- 千代も名の残る大尉の松の文字
- 支那兵は牡丹臺にて多く死し(囃)
- 長城も長物となる敗け軍
- 黄海で後悔をする支那の軍
- 清敗は心配になる支那の國
- 嘘斗り言ふ氣の強い支那の兵
- 勇もなく智もなく支那は腰もなし
- 十六の菊十八の省を攻め
- 敵の腰抜て我が兵壘を抜き
- 我が軍は敵の逃ぐるを鴨綠江
- 牡丹〜と平壤は惚くづれ

○清國なんど口ではいへど腹はきたない濁り水
○深い智略の我が海軍にまけて遼瀋へ逃る支那
○債も擔保の地も取るうへに武威の名を取る勝軍

●日清事件文句入都々逸

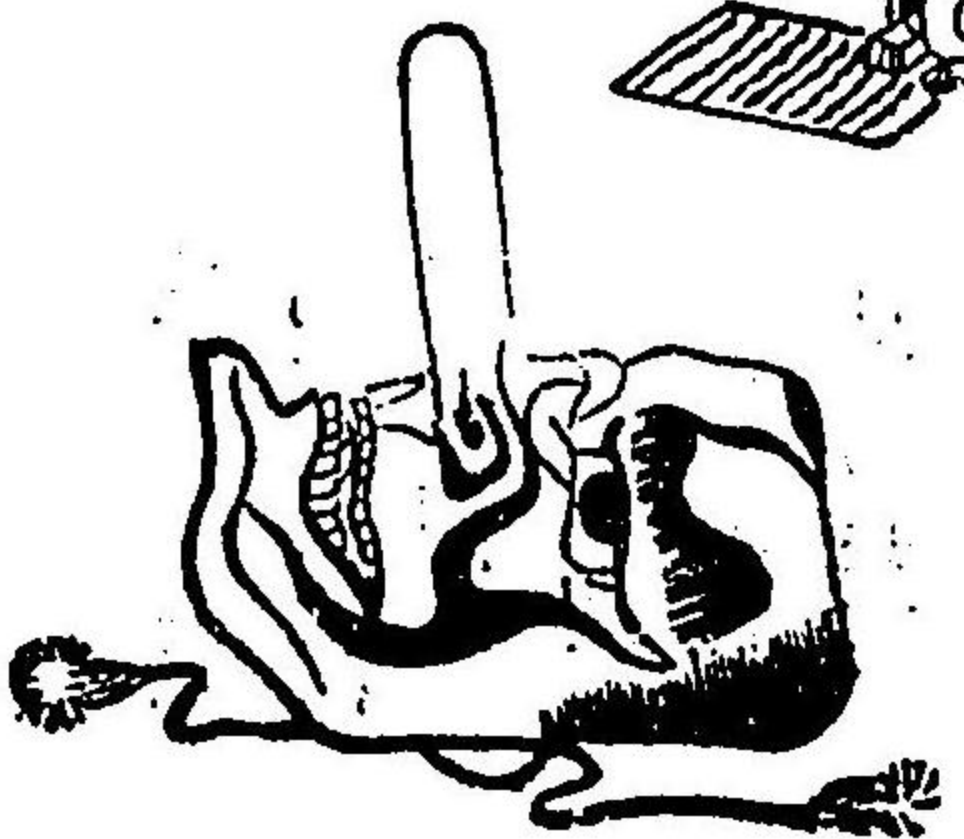
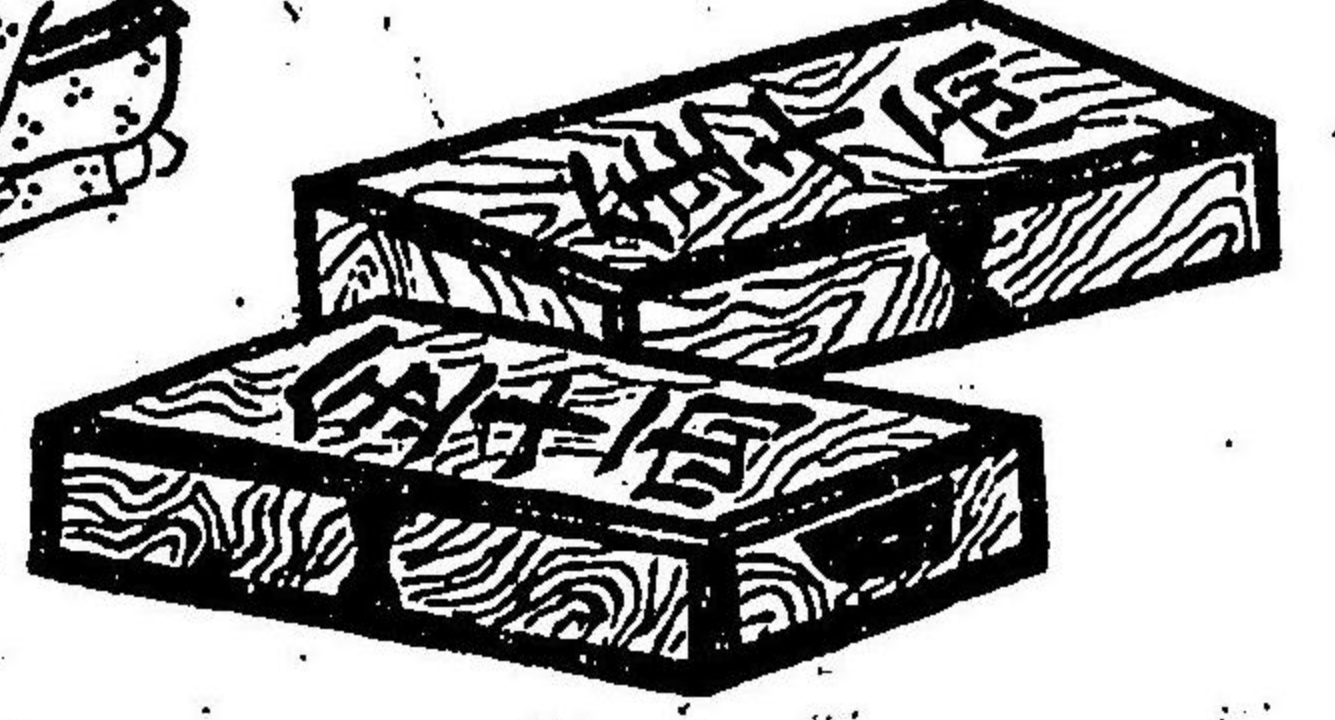
- 主の凱陣指折かぞへ
- 日吉丸雅櫻「年月経たつ其内に變り安いは殿御の心志
- 主は此頃戦地の住い
- 千両帳「留主は猶更女氣の獨りくよ〜ものゝ
- 思や氣になる秋の風
- 思ふ心が知らせたい
- 援さ足さし足チヤン〜坊主
- 十段目「夕顔棚のこなたより現れ出たる
- たのみ切つたる平壤の壘も
- 日本兵士に膽潰す
- 鎌倉三代記「修羅の街の戦也
- 支那の諸艦は皆逃失て
- 一の谷組討「船一艘もあらざれば
- 敵のないのは是非もない

東京文車

新町通音

戀々道人

- 敗る氣で皆チヤン〜と逃支度
- 豚々兵士に支那軍はまけ横け
- 艦体を洗めて支那の氣も沈み
- ラツハ士の名も音も高く轟けり
- 廣島もせまくなるほど繁昌し
- 智恵も淺瀬に乗わける支那の艦
- 言ことのかわるも道理支那玉翁
- 心まですき通ひたる水穂國
- 北京〜と支那兵
- 進むにも眞一文字
- 大鳥は四百余州に



- 戦はず皆な鳳凰の体で逃げ
- 諸藝新報發行に附て新作川柳
- 諸藝新報諸藝進歩の基なり
- ボム〜といへど鼓の音はやさし
- ピン〜しても三味線は弾て見る
- ドン〜いふて面白い太鼓の音
- 龜は空に呑み鶴は空に舞遊ぶ

三國交涉三字文幅對											
清國の國體	國兵信	軍無律	人勇實	大島公使	韓衆威	民示仁	清和義	ラツパ手白神氏	死職止	任不捨	倒放恐
日本の國體	國兵信	軍有律	人勇實	松崎大尉	敵死遲	難不屈	衆厭恐	閔泳駿	國行仁	言無信	衆正坊
朝鮮の國體	國兵服	道不進	人振立	原田重吉氏	功敵慢	危不撓	勇動誇	本編の好評	人誠程	品吉柄	文品評
李鴻章	言兵怒	軍多敗	行死嗔	遠世凱	膽腹才	膽無勇	心力智	三字文續方	一十五	七三六八	四十一二
作遊狸家廻雨											

○いろは唄日清事件日清勝敗論
續き文句

日本の説論

い 如何にチャン／＼能開ける
は 早く降参致せかし
は 豊嶋牙山の戦ひも
は 共にふかくを取りながら
り 李鴻章等を始めとし
り 類は友なる腰なしに
わ 我れに手向ふおろかさよ
よ 邪しき兵を起すとも
れ 禮義作法を知るならば
つ 罪を償い詫るべし
な 長く保ぬものぞかし
む 無理難題をいふべきや
る 命は無事に助くべし
か 惜しき事を得ず戦ふて
や 毛を吹き疵を求るな
け 降参なして誤らば
て 天壽をたもちゑらるべし
さ 左はいへなほも合點せず
ゆ 勇氣たゆまぬ日の本は
み 都北京に押よせて
ゑ 焔魔の聴へ追拂い
す も 最早壽命もせまりたり
末の見通しなき身なり

○いろは唄日清事件日清敗論
續き文句

支那敗論

い 言はるゝ通り我々は
は 恥を恥とも思はねば
は ほしいまゝなる事をいひ
は 東洋一の日の本は
り 理非明白の國なれば
り 類は友なる勇猛に
わ 我が清國をふみにじり
よ 弱い豚尾の及ばぬと
れ 連戦連敗うちつゞき
つ たらや勝たる事はなし
な なさけに助けたまわらば
む なしく思は忘れまじ
る 命のみはこれもふし
か おじひ／＼と手を合し
や 約束ごとかこのたびの
け 毛ほどの事がもとゝなり
て 高麗國をさわがせば
さ 撤兵論のあらそいに
さ したる事もあるまいと
ゆ しき大事引かこし
み 身は生捕のなさけなく
ゑ 得かたき命ねいしも
す も し日本がわが支那の
直ぐに命はなきものを

◎ 毒蛇と玉塚物語

規庸堂芳水 騰
中村狸 遊連記

エ、難有僥倖にござります。本紙諸藝新報も今日發行が第一
號で。人で申せば「チギヤア」と初聲をわけた斗り。未だ何ん
な人間か何んな氣性か。言は皆無譯の譯らない水兒も同様と
いふ譯合でありませうから。何うか其思召様で。お氣長のお愛
讀を願います。御承知の如く小兒と申すものも。いろ／＼あ
つて諸君方の御幼男チヤンの如く。至つて御聰明で御伶俐で
然して御温和でお立派なのがあれば。又た吾々の俸の如く徒
らで馬鹿で。然して輕卒といふ代呂物もござりませう。同
じ小兒でも實に天地月露の違いでありませう。これはナゼ斯
く違いがあるかと申すに全く育方が違うのでありませう。して
見ると小兒の善悪は氏より育ちと申す。よくするも悪くする
も皆育てるもの、よきと悪きによつて替りのある譯であり
ますから。此諸藝新報も貴郷方のお育で下さるゝお育で下さ
らぬによつて善もなり悪くもなるゝ申す次第でござります
から。何うか號を重ね日を重ねて天晴れ一人前の人間になる
様。只管お育の程を願います。却説今日より引續き御機嫌に
備へますお話は「毒蛇と玉塚物語」と申す未だ世の中の講談
家や落語家の人達の讀た事のない至極面白くは諸君の仰ら

れる言葉で、講師自ら申上ては恐れ入りませうが實に面白いお
話でござりますから。これを引き續き御機嫌に備へます。エ、
古語に遠く近きは男女の中。實に能く申しましたもので
只今でも日々新聞に。やゝも致しますと姦夫願といふやう
が能く載つて居りませう。甚しいのは河内の十人斬など、申
す途方途徹もない大騒動のものもござりましたが當今はチヤ
ン／＼の万人斬りでござります。これは東洋平和の爲めで
是非のない事さうでござります。其様な事は何うでもと
致しまして。今を去る廿九年以前則ち慶應二年寅十一月と申
せば御老人方は能く御存じの彼のお板さんの降りました前年
の事でござります。鶴の内の厩屋町三寺筋を北へ入りました西
側の路に丹波屋裏と申のがござりませう。只今の機に厩屋町
の奇麗になつて居ない時でござります。随分其日暮しの
人も居りましたさうで。其丹波屋裏の小口から三軒目の家に
亭主は道樂者で字を伊賀竹と呼れ。日々堵場へ勝負事に出で
居る家がありませう。其伊賀竹の女房をお菊といひました。が
年の頃は其時丁度廿八才。亭主は道樂者でありませう。其
つも布子の上に三尺帯といふ姿でありませう。此お菊といふ
女房は。亭主に似合ぬ柔和女でいつも洗濯物ではありませ
う。チヤンと折目の附いた衣類を着せして。然して詞の言ひ様
も「ハア内の親輪か」なんていふ様な事はすこしもありません

所で此夫婦は甚だ不釣合。牛の出合に推草を遺たか眞黒の差
身に二不酢といふ譯で何んだか變的な女夫でありませう。丁
度其月も廿日といふ時。長家のお熊婆アといふがお菊の一人
り居る所へ這入つて来て。「ハイお菊さん相變らせずお寒う……
……イヤお寒うといへば寒い筈よ最今日は果の廿日だもの……
……大方今日は澤山半拂いが出るだらう……時に竹さんは
留主か子……竹さんの道樂も久しいもんだがお前への温和
も久しいもんだ子へ。ナト何んとか言つたら何うだ子……
斯ういつては何んだか煎附る様だか。お前への様な奇麗顔を
持つて。然してこんな裏長家に煤ぶつて居るといふは。全体
お前へがお人上しといふのだ。此間も大丸のお店のお手代で
宗助さんと仰しやるかたが私の家へ見えて。小口から三軒目
のお家の細君は。いつもお一人りで入らつしやる様ですが全
体アノ家の御亭主は何をなさる方だと聞か様子か何うも只
の問ひ様だるへと思つて居たのよ。すると其後いつともく
私しの家へ来ておめへの事を問ふて居るから其所で私しと思
つて居るのは。おめへさへ竹さんに別れる腹ならナニ此様
な煤ぶつた家に暮さないでも。立派にお妾さんで圍はれる事
か出来るよ……夫れも私し様の様に五十六十になつては追附
ないが。せだおめへなぞは廿八といつても。子のない徳で廿
四五で通るよ……尤も私しも外の方ならさうは思はないが

アノ宗さんと仰しやる方は。實に柔和つて然して心切があつ
ていつもおめへの事をいひなされるにも。只顔かたちの奇麗
計りでなくお心掛のよい所が肝心だとか何んとかお言ひな
るんだから。夫で私しもキヤ／＼思つて……これが外の事
でこんな事なら夙にお世話をし居る譯だが何をいつても竹
さんがあるから。實は話もしないで居たのよ……ナニニ御
心切もお世話も入つたものかね。余り竹さんが譯られないから
ツイ長家のもも氣の毒に思つていろ／＼障をやつて居るの
よ……イヤ障といへば障をすれば影だ。竹さんが歸へつて
來たまた後らに來ると歸へつて仕舞ましたが入り違ひに歸
へつて來ましたのは道樂もの、伊賀竹でござります。其日も
堵場の間が悪かつたものと見せして襟に縋子のかゝつた女
の袴を着せして。門を這入ると。「ヤイ醜婦今友達の所から
僕をよこした時。なせ己のいふ通り工風をせないナニニ出來
ない事かあるものか手前さへ裸体になりやア雜作は子へのだ
……ナニ長家のお熊婆アが來て大丸の手代が手前へに惚
れて居るから世話をする様な事をいふて來た程だから裸体な
どになつて居ては此後何んな事を他にいわるゝか知れない……
……ハ、ハ、ハ、其奴ハ妙だ……お熊婆アが其様事言つ
て來たのは此伊賀竹の運の開く時が來たのだ……物も相談
だが何んぞ其大丸の手代で一番己れを助けて呉れないか……



菊 「助けて呉れて何を何うして」竹 「何を何うするて手前へでも子へ大概知れた話だ」菊 「知れた話とは」竹 「耳をかきな………」
 ……な譯たか「そんなら其御手代に筒もたせをして」竹 「シツ
 静にしるエ………」

御客様方に申上ります。此所で兩人が申された事は何でありま
 すかと云へば。結局伊賀竹が女房のお菊に。大丸の手代を筒
 もたせにして。金儲がしたいと申された譯で。一時は女房の
 お菊も。ソナ事はとはねつけては見せましたが。否やといふ
 てはさしづめ大三十日といふ。大節季を越す譯に参りません
 から。止を得ず亭主の言葉に従ひまして。大丸の手代を筒も
 たせにかけることになりましたが。可愛相なは手代の宗七で
 ござい升。かゝる工みのあるとも知らず。其日も丁度申刻下
 り。只今で申す四時過でございませすが。丸の中に大の字の大
 風呂敷に。絹布を包み丹波屋の裏へやつて参りました。此方
 は豫て夫婦相談の上で待つて居ります事でありませから。夫
 れど見るより亭主の伊賀竹はボイと家を出で仕舞ました。お
 菊は宗七の顔をチヨイト見まして。菊 「いつも御氣根によくお
 まわりで御座いますチ。トいつにないお菊から聲をかけまし
 たから。只さへ物のいひたい宗七の耳には。支那人の捕子が
 命を助けてやると聞たより嬉しかつたであらうとは。今日の
 想像でございましてまだ其頃は諸外國人も長崎より來ない時

でありましたから。地獄で佛でも形容いたしてなきまじで

宗 「ハイ難有ございませすイエナニ彼様に廻りますのは手前へ
 の役でございませすが實は今日の様に冷る時は少々迷惑を致し
 ませす」菊 「左様でございませうともマア貴脚一吹か吸いなさい
 ませしな」宗 「ハイ難有………」と一寸思案をいたしませしがこ
 が大事の所でございませす。古人も申しておかれませした通り。
 人の未だ血氣定まらざるこれを戒しむる色にありと實に金言
 でござい升。もし此所で年を取つたものでございませれば
 ドッコイ迂活にと。氣の附く所でございませすが。宗七は此日
 身を亡す因縁でも申ものか。宗 「夫れでは一寸一吹かして貴
 いませうと。脊負て居た風呂敷包みを。伊賀竹の上り口にお
 ろしませして。火鉢の侍で田葉粉をのんで居りましたが。こな
 たのお菊は豫て工みのある事でございませから。マア貴殿
 同じ直でございませすからチヨイトこちら迄おあがりなさいま
 せしな」宗 「イエ何ういたしませして。旦那のお留主中左様なこ
 を致しましてはモシお歸りになりませして。申譯がございませ
 ぬ」菊 「チーニ貴脚宿のものは今出ましては。逆も今晩中かへ
 る事ではございませせん。夫れも茶屋遊びとか。酒の樽子とか
 申のならよろしうございませすが。否なく博痴とでござい
 ませすからとほろく涙をこぼしますから」宗 「ハイ左様で
 ございませすか。夫れは御心配で御座いますチ。イヤしかしか氣

避いなきいますな。またくお氣の附く時がございますから
 余り御心配なすつてはお骸の爲によくありませんと。左も心
 切に宗七が申しますから。お菊も人の心切に聊か感じまして
 ……ア、一人もいろくゝあるものだ。此人の様な心切な人
 もあれば。また内の人の様な氣強い人もあると。フト心に感
 じたのが身にしみくゝとかなしくなつて。何んどのう宗七が
 可愛なりましたから。始めは筒もたせの積りが今では眞實惚
 れくゝと致しまして。ハイ御心切に難有ぞんじます。貴婦
 の様に御心切に仰しやつて下さいますとツイ……と。しば
 らく何んにも言はず宗七の顔をじつと見ておりました。古
 い川柳にも申してございます通り。目は口ほどに物をいひど
 目の内に宗七を愛する心が起りましたから。大變でございま
 す。宗七も其心は何んもなくうつりましたものを見えて。い
 つの間にあがつたか。伊賀竹の座敷にあがつて二人りでしみ
 くゝ話を致しましたさうで（お客さま方に申します。此しみじ
 みはなしをいたしましたのは。ホントの話してございますか
 ホントの話でございせんか。今すこし委しく申しあげたい
 のでございすが。余り申しますと。聊か憚る所があります
 から。其所は宜敷御推察を願ます。所へ歸つて來ましたのは
 亭主の伊賀竹でございす。表の戸をシワラリと引明けまし
 て「サア見附たぞヤ、二才野良。ウエ他の跡アを慰みもの

にしやアがつて。トウするのだモ丁間がならない。ウエは
 何所の餓飢だ。フマ大丸の手代だナ。よし／＼サア來いウエ
 が親方へ連れて往て。文句するのだ此のヒヨット野良ど。白
 眼た時には實に宗七は青くなりました……夫れは左様で御
 座いませう。御案内の如く大丸の店では多勢若い衆の居る家
 でございすから。若し此事を多勢の人の中で言はれた時は
 は。實に生きて居る事も出来ぬ始末でございすから。親
 方御尤で御座います。私しが悪ふございしました何うか私しの
 命をお取下さいます。御了間下さいましと。手を合して願
 みますが伊賀竹は中々聞させせん。竹「へ、メウエ等の命を願
 つて何の間釋に合ふものかい。命の代りにこれを取つてやる
 と上り口に在た絹布の包を其儘もつて驅出しますから。一セ
 シ夫れを持つて行かれましては。親方へ申譯がございせん
 何うぞ私しの命をお取り下さいます。夫れは御了間下さい
 ましと風呂敷包みにとり附ました。伊賀竹は是でこれを解
 飛し其儘表へかけ出しました。お菊もあまりの事に。竹「
 ん夫れは余りだど追かけました。が終に行衛か知れせん。其
 所で宗七は逆もお店へ歸る事が出来ねば。宗「お細君さん……
 ……左様なら目の中に涙を一ばいうかめて飛出しました。何
 うも只事でないとお菊も跡を附けて行きますと。金屋橋の上
 から身をおどらしてサンブリ身を洗ました。これを見てお菊

悪いなさいませぬ。またくゝお氣の附く時がございますから
 余り御心遣なすつては、お骸の爲によくありません。左も心
 切に宗七が申しますから。お菊も人の心切に聊か感じまして
 ……ア、一人もいらくゝゆるものだ。此人の様な心切な人
 もあれば。また内の人の様な氣強い人もあると。フト心に感
 じたのが身にしみくゝどかなしくなつて。何んどのう宗七が
 可愛なりましたから。始めは筒もたせの積りが今では眞實惚
 れくゝと致しまして。ハイ御心切に難有ぞんじます。貴聊
 の様に御心切に仰しやつて下さいませとツイ……と。しば
 らく何んにも言はず宗七の顔をじつと見ておりましたが。古
 い川柳にも申してございます通り。口は口は口に物をいひど
 目の内に宗七を愛する心が起りましたから。大變でございま
 す。宗七も其心が何んとなうつりましたものを見て。い
 つの間にあがつたか。伊賀竹の座敷にあがつて二人りでしみ
 づゝ話を致しましたさうで（お菊さま方に申します。此しみじ
 みはなしをいたしたしたのは。ホントの話しでございますか
 ホントの話でございせんか。今すこし委しく申しあげたい
 のでございませぬ。余り申しますと。聊か憐れ所がございま
 します。其所は宜敷い御座います。所へ歸つて来ましたのは
 亭主の伊賀竹でございませぬ。表の戸をクワラリと引明けまし
 て「サア見附たぞサア」野良。ウニ他のアを感みもの

にしやアがつて。ドウするのだモフ了間がならない。ウエは
 何所の御飯だ。フン大丸の手代だナ。よし〜ア来いウエ
 が親方へ連れて往て。文句するのだ此のヒヨット野良と。白
 限た時には實に宗七は背くなりました……夫れは左様で御
 座いませう。御案内の如く大丸の店では多勢若い衆の居る家
 でございませぬから。若し此事を多勢の人の中で言はれた時に
 は。實に生きて居る事も出来ぬ始末でございませぬから。親
 方御尤で御座います。私しが悪ふございませぬ何うか私しの
 命をお取下さいます。御了間下さいませと。手を合して頼
 みませぬ伊賀竹は中々聞かれません。竹。ハ、ンウエ等の命を取
 つて何の間釋に合ふものかい。命の代りにこれを取つてやる
 と上り口に在た絹布の包を其儘もつて取出しますから。一モ
 シ夫れを持つて行かれましては。親方へ申渡がございませぬ
 何うぞ私しの命をお取り下さいます。夫れは御了間下さい
 ましと風呂敷包みにどり附ました。伊賀竹は是でこれを脱
 飛し其儘表へかけ出しました。お菊もあまりの事に。一竹さ
 ん夫れは余りだど追かけました。が終に行衛か知れませぬ。其
 所で宗七は迎もぬ店へ歸る事が出来ねば。一お菊若さん……
 …左様なら目の中に涙を一ばいりかめて飛出しました。何
 うも只事でないとお菊も跡を附けて行きたすと。金屋橋の上
 から身をおさらしてサンブリ身を致しました。これを見てお菊

丁子堂主 藥劑師 本林平三郎 製



○藥價
 一日分二包入五錢半 週分拾五錢
 週分三拾錢 四週分壹圓

●ひる。しつ。かさ

とは梅毒、瘰癧の俗語にして本劑は此れ等の諸症に卓絶
 の効あり故に

◎下疳。横痃。癩疾

胎毒、くさ、風癩、痒疹、頭顔鼻の發疹、楊梅瘡、瘰癧
 骨痛、疔毒にて腰足痛み、健麻質折、瘡風又は

◎逆上のよくして

耳鳴、耳遠く、眼かすみ、口中たぐれ、咽喉腫れ痛む等
 に皆治癒す依て平素

◎梅毒ある人は

本劑を毎日一包宛用ひ置ばしつ毒を悉く下し梅毒の根を
 断殊に大便の

◎通下を快くし

逆上を下げ、精神を爽快にし身體を強健にして自から氣
 を活潑にするの特效あり又本能書には病客の心得、養生
 法、病客自身の病法、梅毒の理解、内外國の賣捌所等を
 記載せり



發行所 本林丁子堂

發行所 大坂四ッ橋 本林丁子堂本店
 發行所 大坂四ッ橋 本林丁子堂分店
 發行所 大坂四ッ橋 本林丁子堂分店



本日ヨリ 陸海軍 全勝を 勝利 紐

此勝利紐は我帝國陸海軍の勇猛なる戦捷を祝し我が四千有餘萬の強國なる同胞諸君が大勝利の吉報に接する如に全勝を祝して盛なる戦捷會を催し其他種々なる會合へ御臨會の我帝國臣民各位は是非此勝利紐を胸襟に掛け御出席相成ば一層の勇氣なる裝飾を加へ永遠の紀念品として是非愛國なる諸君御買成を乞

諸系組紐商



大阪心齋橋筋願成町半丁南入
ゑちとや糸店
大門新兵衛

が氣の毒でたまりせんから。直ぐ橋の上へ来て。菊さんかんにんして下さい。貴卿一人は殺しません私も一所に死にます。これも同じく川の中へザンブリ飛込ました。一モシくお玉さんく。なんを夢でも見なしたか。大層かそわれてお出でなすつたよ。起されたのは全く島の内の富田屋の藝妓のお玉といふもので。一そんなら今私しが。伊賀竹の女房のお菊であつた。思つたのは夢で在つたか。茶をのんで一息入れました。このお玉といふが後に海蛇お玉と字を取る事になるお話でございますがお玉も茶を呑んで一息入れましたから。諸師もお湯を頂戴して次號に申す事にいたします(尚此所の差書は本文とかわつてございますが此解は次に申上)

戦勝ヲ祝シテ

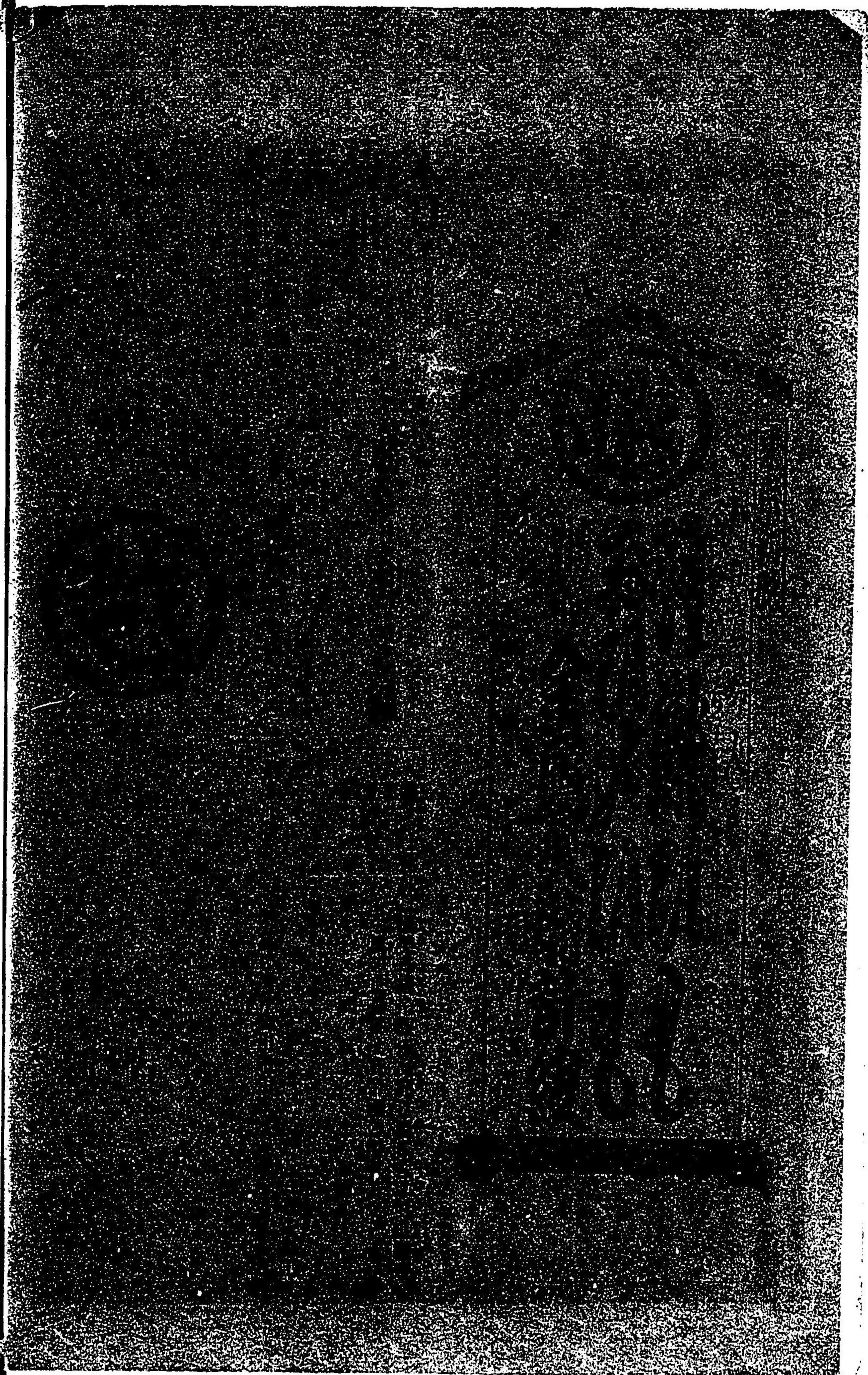
一月一日ヨリ半直段
全十五日迄半直段
晴雨ナ不論寫シマス

清水晴雲堂

○夫りや聞かせせん李鴻章さん。お調無理とは思はねど。抑戦ひの始より。末の末まで逃げかくれ。互ひに恥をさらしあい。何んの智略も内証の。怪我さくても思費せぬ。ホンの難兵と思ふのか。大事のく。今度の難儀。命の際に首捨て。活しの道か立ますか。非道とも悪人とも思ひあきらめ是れ申し。一所に暴して下さんせと逃げたる人家を取りむしる

○李爺と遠世と諸共にしやくりあげたるペン涙。冥土の旅へ討入の師匠は彌陀佛。釋伽牟尼佛六道能化の弟子となり。空の河原で砂手本。いろはかくより恥をかき。散り行く軍さ是非もなや。翌日の日誰れか味方せん。らむ憂目見る支那心。つるぎと死出の山け越えあさき夢見し心地して跡は。叶はずせひもなし今日は古郷と逃げかへる北京をさして走りゆく

○支那殺すは。日兵さん。何所に進んでござらうやら。今更いわずもしれながら。遠世凱といふものないならば朝鮮國も日本に伏し。獨り立たる開明國とくにも。獨立させんもの遠世凱の身かつてばかり。すかん豚尾かあるゆゑに。思へば此腹が。去年の秋の今頃にいづそ極つて仕舞たら。斯うした厄介はあるまいもの。土地に添わぬと知りながら。未開



が氣の毒でたまりせんから。直ぐ橋の上へ来て「宗さんかんにんして下さい。貴卿一人りは殺しません私しも一所に死にますと。これも同じく川の中へザンブリ飛込ました下女」
「モシ〜お玉さん〜。なんぞ夢でも見なしたか。大層おそれてお出でなすつたよと。起されたのは全く島の内の富田屋の藝妓のお玉といふもので。玉そんなら今私しが。伊賀竹の女房のお菊であつた。思つたのは夢で在つたか。茶をのんで一息入れました。このお玉といふが後らに毒蛇お玉と字を取る事になるお話でございますがお玉も茶を呑んで一息入れましたから。講師もお湯を頂戴して次號に申す事にいたします（尙此所の差書は本文とかわつてございませすが此書解は次ぎに申上り）」

戦勝ヲ祝シテ

寫眞

一月二日ヨリ
全十五日迄半直段
晴雨ヲ不論寫シマス

大坂南區道頓堀芝居前

清水晴雲堂

◎日清の上りり障り

○夫りや聞かせん李鴻章さん。お詞無理とは思はねど。抑戦ひの始めより。末の末まで逃げかくれ。互ひに恥をさらしあい。何んの智略も内証の。怪我さされても思賞せぬ。ホンの雑兵と思ふのか。大事の〜の今度の難儀。命の際に首捨て。活しの道か立ますか。非道とも悪人とも思ひあきらめられ申し。一所に暴して下さんせと逃げたる人家を取りひしる

◎菅原傳授日清さわり

○李翁と遠世と諸共にしやくりあげたるペン涙。冥土の旅へ討入の師匠は彌陀佛。釋伽牟尼佛六道能化の弟子となり。雲の河原で砂手本。いろはかくより恥をかき。散り行く軍さ是非もなや。翌日の日誰れか味方せん。らむ憂目見る支那心。つるぎと死出の山け越ゆるあささ夢見し心地して跡は。叶はませひもなし今日は古郷と逃げかへる北京をさして走りゆく

◎日清の三勝半七さわり

○支那殺すは。日兵さん。何所に進んでござらうやら。今更いわずもしれながら。遠世凱といふものないならば朝鮮國も日本に伏し。獨り立たる開明國とどくにも。獨立させんもの遠世凱の身かつてばかり。すかん豚尾かあるゆゑに。思へば此腹が。去年の秋の今頃にいづそ極つて仕舞たら。斯うした厄介はあるまいもの。土地に添わぬと知りながら。未開

な朝鮮の因循故。獨立は叶はずとも。教しへて見たいと辛抱して。これまで見たのが。恩があだ。今の思ひにくらぶれば一年まへに此支那を殺す心が附かなんた。こらしてやれ日兵さん。支那此上に助けてやると。怨み憂みはつのはど。平氣に思ふ清國心なみだに嘘をませにけり

◎日清の落語

○「子へ君、日清事件も追々進軍して第一軍は牛莊附近まで進軍した子へ。さうよ今に北京も落すだらうか何か日清事件で金儲けは子へか。有るども。此間も朝日新聞社の小川氏にあつたが戦地で第一に不自由なものは薬ださうだか君も知つて居るアノ船越町壹丁目の長命堂では自分の製劑の愉快丸を多く戦地へ販賣して非常の金儲をやつたさうだから何んでも薬を戦地へもつて往つたら非常の金儲が出来よ、成程夫れで譯たよアノ長命堂では今度美人といふ立派な奇麗な書齋を出版してアノ家の薬で十五錢以上のものを買つた人には誰れにでも美人といふ書齋を添へものに選るとよ。ハ、其奴は面白アノ長命堂の愉快丸は近頃非常によく賣れるさうで僕もアル婦人から買つて呉れどたのまれて居るが全体其美人といふ書齋はいつからいつまで添へものにするだらう。君また知らないか大阪の諸新聞に出ない新聞は一ツも子へせ其美人を添へるのは十二月十五日から廿八年一月の十五日迄三十日間

だどアノソラ今度發行の諸藝新報にも廣告が在つたよ。成程愉快丸の廣告だから諸藝新報に出したのだナ。ナせ。愉快に諸藝は出合ものだ

○「必齋橋順慶町南へ入大門親兵衛といふ糸屋で今度清にぞしらへた勝利紐といふ羽織紐を見たが、見たアノ越後屋は中々感心に能く勉強する子金屋入時計紐とかまたは新形羽織紐とか紐一切系類は府下で第一等で、然して廣告もよく勉強するがアノナに廣告を出して人が一時になつた時計とらするのだから。ナ。アノ家は幾等人が一時になつても大丈夫だ。ナ。ナせ。大門だから

○「城東の今福で婦人の薬を賣る高木寅四郎といふ家を知つて居るか。君でも子へ今福の高木といへば婦人薬の第一等だから今日の新聞を見るものがしらないものがあるものか。殊に同家の薬は三府は元より諸縣下へ多く賣れる上アノ家の薬の賣れる爲め城東の土地で繁昌して俄に金満家が多くなつたよ。ナ。ナせ。だらう。でも今福といふから俄に金が出来たのだらう

◎日清謎掛

●成歡の戦ひトかけて 藏ざらへの見切賣
心は支那の(品)の大負
●支那 兵トかけて 貧民の葬式
心は與が(腰)ない

●日本 兵トかけて 正札附の代呂もの
心は ちつともまけなし

●清國の今日トかけて 日歩貸の金
心は 李(利)計でヤキくして居る

●日清の戦ひトかけて 貧乏人の節季
心は いつも清敗計り

●日本の軍略トかけて 貯蓄金
心は すゝむ程利がある

●豊島の敗兵トかけて 貧人の散財
心は 見ず(水)に浮てゐる

●清國の軍法トかけて 輿論に反對の原案
心は 不起立(不規律)計り

●清國の運命トかけて 裸の嫁入
心は 長持がない

●清國の口實トかけて 損の立商法
心は(理)もなければ徳もない

●支那の軍艦トかけて 肺病の人
心は 咳痰(石炭)に苦しむ

●我兵の彈丸トかけて 拍子木の音
心は 打出せば(勝々)と成

●牙山の凱陣トかけて 蜂の櫻
心は 花(鼻)か高い

●劉 銘 傳トかけて 堅い金貨
心は 李(利)の爲にはうごかぬ

●袁 世 凱トかけて 下手な茶打
心は 地(智)のない爲に逃げる

●豊嶋の海戦トかけて 腫物の腐敗
心は海(腦)になやむ

●清兵の士卒トかけて 漆屋の丁稚

●日本の軍略トかけて 金華山の景
心は づれも勝(佳地)計じや

●日兵の勇軍トかけて 二百十日の大風
心は 清國(新穀)なやます

◎日清替唄

●松盡しの替唄
傳へはやせや清國。一本目には一の負け。二本目には逃げで負け。三本目には三度負け。四本目には支那の負け。五本目には五度の負け。六ツむかへば戦はず恐れの負けや素手の負け。七本目には捕子負け。八本目には恥ぢの負け。九ツ小道を逸歩行き。十で遠くへ逃げて負け。日にまけ。時負け。暮に負け。連事の負けに恥辱をこめて女々しいナ支那夷す

●淺くとも替唄
細くとも清と流れの水穂國。はんに勇氣の兵もの等。登つて見たかアノ牙山。敵は打たないかいナ
威張ても卑怯未練のチャン。飛んで行衛のかけ見ぬす。残して去たか明がらの。跡は恥しないかいナ
長くとも末は亡ふる豚尾國。取つて勇氣の我勝利。残して見たい紀念碑に。勝を記すじやないかいナ

●黒髪(髪)の替唄
組み髪みに。向ひかけたる大戦。攻めて出た學の且こそ。地

取り知る學の草枕。墨は堅しく積んだといふて勇氣の勇に敵せめて、逃しなびかし、難作なや、進むとしらで進む凱さ

●菅野の團圓の替唄

支那のナア。亂はたらく。日と清との戦争がさる南京素よりいたづらものにて。長い髪の毛に欲の氣をからみこみ。底意朝鮮十分望み其所で日の兵が義氣を出して腹を立て。是れささてくく。南京、勇がなくても智慧がなくても、朝鮮國は獨立た上憎や汝國他邦の身分他の地面へ這入るのが悪い、南京の兵めが戦地を取られて牙山を抜れて遠くへ進出すサヤくッウダくッウウカイナ

●緑んかいナ替唄

海の軍さは、日清で、出艦入艦、軍艦、放つ大砲支那砕く、容易く捕子の船かいナ
山の軍さは、成歎で、進む退く、大軍、放つ銃砲支那砕く、大層に分捕り有るわいな
支那の公使は、袁世で、撤兵撤兵、引け引かぬ果ぬ争ひ、支那日本、逃げたは無腰の袁かいナ
○西「ナイ」中村々々マア待ちたまへ、君が今度非常に諸藝新報に勉強して書て呉れたから其勞を謝するため淡路町の改進黨をおこるよ 中「西村君改進黨といへば浪花橋た子へかこへは新町はしだから近くの北村へ往つたらどうだ 西「中

村でも子へ何をいふのだ今日チト高尚な考へをもつものが外
の肉屋へ行くものか子皆な改進黨に極つて居るよ、夫れに改進黨では椅子の様なものでも大變注意して自由椅子といつて
すわるにも腰をかけるにも自由になるものを用いて其外なん
でも彼でも中々よく注意して居るから高尚なものは皆アノ家
へ行くよ 中「ハ、ソ夫では政治家是非改進黨へ行かなければ
ならない子 西「ナセ 中「自由椅子があつて名が改進黨だもの

明治廿七年十二月十八日印刷
明治廿七年十二月廿三日發行 (定價金五錢)

大阪市南區製谷仲之町百六十
二番邸平民
編輯者 中村善平

大阪市西區北堀江上通壹丁目
百三十六番邸平民
發行者 野入佐次郎

大阪市南區千日前阪町角
發行所 圖書館

大阪市西區阿波堀裏町廿八番
邸(一貫舎活版所)
印刷者 清水修藏

大阪市南區難波新地五番町
廣告取扱 西村鉄次郎

賣捌所 全國書籍商

●帝國大勝利——愉快々々——

ちやんく殺して愉快々々

男女健全快樂の秘藥



秘製愉快丸

三日分 貳拾錢 七日分 三拾五錢
廿一日分 九拾錢 卅五日分 壹圓四拾錢

此愉快丸を用ゆれば忽ち元氣を回復し精魂を強め腎水を増し肉を肥し身体を温め血液の循環を能くし記憶力を革固にし精神をして活潑爽快ならしめ勇氣勃勃兵に人生に無量の快樂を得せしむる神驗不可思議の靈劑なり

●疑ふ勿れ……早く試に……即効神の如し

三十日間よ色白くある

白色あらび粉

定價 十五百分拾五錢 三十百分廿五錢

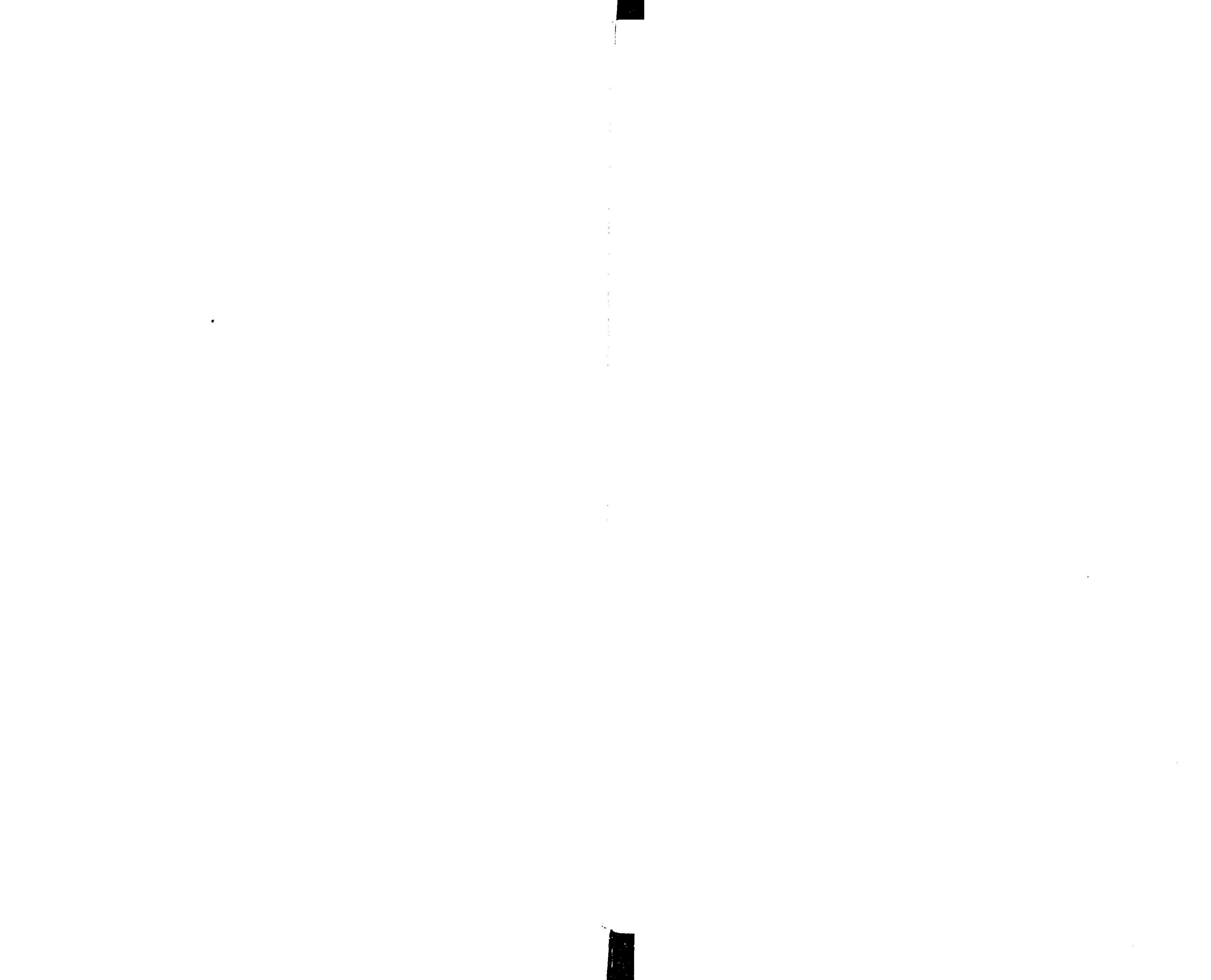
此白色あらび粉は從來ありふれたる粗雜の品と違ひ新奇發明古今無比の良品なり故に如何はと色の黒き人でも三十日間御使用なされれば必ず色白くつや美しくきめこまかく玉の如き美人となる事を保証す

萬一効能なき時は代價返金す

●秘製愉快丸本舖

大坂東區船越町一丁目

檜尾長命堂





074335-000-1

特54-353

諸芸新報

中村 善平/編

M27

CEI-1558

